

大仏開眼会の構造とその政治的意義

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院文学研究科 : 都市文化研究センター 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): 東大寺, 盧舎那仏, 大仏開眼会, 東大寺要録, 芸能 キーワード (En): Todaiji Temple, Vairocana Buddha, Eye-opening Ceremony of the Great Bronze Buddha, Todaiji-yoroku, performing arts 作成者: 栄原, 永遠男 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20171213-239

大仏開眼会の構造とその政治的意義

栄 原 永遠男

要 旨

本稿は、東大寺の大仏開眼会について、その構造を全体的に把握し、その政治的意義を考えることを目的としている。

開眼会が行われた752年（天平勝宝4）4月9日という時期に注目すると、都市貴族や王族・官人などの支配者層の分裂は抜き差しならないところまで来ていた。そのような中で、盧舎那仏と東大寺が、ともに未完成であったにもかかわらず、開眼会は強行された。

かかる開眼会の意義を理解するために、まずその構造を把握する必要がある。このため、基本史料である『東大寺要録』醍醐寺本の記載を分析検討し、開眼会が、(1)準備、(2)開眼の儀式、(3)諸芸能の上演、(4)布施の支給、の4つの部分で構成されていたことを指摘し、それぞれの内容を検討した。

その結果、開眼会は、(1)～(4)の全体として、盧舎那仏が天皇の統治する帝国を庇護しており、天皇の統治とそれを背後から支える盧舎那仏の力によって、政治的な分裂は解消する、というメッセージを発していたことをあきらかにした。

キーワード：東大寺、盧舎那仏、大仏開眼会、東大寺要録、芸能

1. はじめに

8世紀の中ごろ、国家の総力をあげて東大寺が平城京に隣接して造営され、本尊として盧舎那仏¹⁾が鑄造された。その大きさは、高さ16メートルにも及ぶ。この巨大な盧舎那仏の開眼会が、752年（天平勝宝4）4月9日²⁾に盛大に行われた。その有様は、『続日本紀』同日条につぎのように見える。

盧舎那大仏像成、始開眼、是日、行幸東大寺、天皇親率文武百官、設齋大会、其儀一同元日、五位已上者、着礼服、六位已下者当色、請僧一万、既而雅楽寮及諸寺種々音楽、並咸来集、復有王臣諸氏五節・久米舞・楯伏・踏歌・袍袴等歌舞、東西発声、分庭而奏、所作奇偉、不可勝記、仏法東帰、

齋会之儀、未嘗有如此之盛也、

これによると、開眼会は「齋(大)会」とされ、その内容は、元日朝賀の儀式と同様の開眼の儀式と、さまざまな楽舞からなっていたことがわかる。これらの全体について、「仏法東に帰りてより、齋会の儀、嘗て此の如く盛りなるは有らず」と記しており、きわめて盛大であったことがしのばれる。

「開眼」とは、新たに作った仏像または仏画を堂に安置し、仏眼を開く意味で魂を入れることである³⁾。そのための儀式の全体を「開眼会」という。具体的には、花や香華をささげて祈りながら、筆で仏像の黒眼を書き込む。それによって、その仏像は、ものを見ることができるようになる、と信じられた。

日本古代において、ものを見るということは、

抽象的には、見た主体が見られた客体を支配する、ということの意味した。盧舎那仏は、開眼されることによって、その目で世界を見、見ることによって世界を仏法によって支配する存在となるのである。盧舎那仏は、開眼することで、単なる銅製の物体から宗教的存在になったと確信された。

開眼会では、この開眼の儀式につづいて、さまざまな芸能が演じられた。これらの芸能は、都市空間の中で都市貴族たちによって芸術的に洗練されたものであり、都市文化の粋とすることができる。その演目には、中国・朝鮮のみならず、東南アジアに由来するとされる多様な芸能が含まれていた。どうして国際色豊かな芸能が上演されたのか、これらの芸能の上演も含めて、開眼会の意義を考える必要がある。

このような構成からなる開眼会については、これまでさまざまに言及されてきた⁴⁾。しかし、その多くは一般的にふれるにとどまるか、もしくは芸能史・音楽史・国文学・美術史などの限られた観点から、楽舞そのものの内容や芸能史上の位置づけ等の解明、正倉院に残る開眼会の遺品の研究に力点が置かれてきた。そこでは、芸能部分をも含む開眼会の意義を全体的に検討するという観点が弱いと思われる。

そうした中であって、近年、宮城洋一郎⁵⁾・杉本一樹⁶⁾によって注目すべき論考があいついで発表された。両氏の論考は、開眼会全体の構造を把握し、その意義をあきらかにしようとするものであり、啓発されるところが多い。しかし、『東大寺要録』の記載にはなお検討すべき問題が残されており、それによって、開眼会全体の構造や意義についても、両氏の考えをさらに進めることができると考える。

本稿は、さまざまな芸能の上演も、開眼会の政治的背景と深い関係があるという観点に立って、都市文化の粋とも言える開眼会の構造を把握することを通じて、開眼会の意義を政治的観点から考えることを目的としている。

2. 盧舎那仏などの完成度

まず、盧舎那仏や東大寺の制作上の段階を簡

単におさえておきたい。開眼会の時、これらはどの程度までできていたのであろうか。

盧舎那仏製作の経過は、『東大寺要録』に引く「延暦僧録」や「大仏殿碑文」に記されている。これらによって過程をたどってみると⁷⁾、造営工事は、745年（天平17）8月からはじまったとされている。まずはじめに、地盤を固める基礎工事が行われたであろう。東大寺周辺の旧地形を復元してみると、盧舎那仏は、東の山から張り出した尾根の上にちょうど位置している。この尾根の上面を削平して平坦面を造成する工事が行われたと考えられる。

次に、塑像の鑄型が造られた。聖武天皇・元正太上天皇・光明皇后が、746年（天平18）10月6日に行幸して、盧舎那仏の前後に1万5700余の灯火をならべる大規模な燃灯供養を行ない、数千の僧に脂燭を持たせて盧舎那仏の周囲を3回まわらせている（『続日本紀』）。おそらくこのころ、塑像が完成したのであろう。

仏身の鑄造は、747年（天平19）9月から749年（天平勝宝元）10月までの約2年間に、全体を8段にわけて行われた。その際、鑄型にかかる高い圧力を支えるために、あらかじめ鑄型の周囲に土を盛って固めておく。これを8回くり返したのである。そのたびに周囲の盛土は高くなり、8段目の時には、鑄型全体が巨大な山の中に埋もれてしまった。冷えた後、盛土の山と鑄型を取りのぞいたとき、はじめて銅の仏像が姿を現わしたのである。

仏身の鑄造が終わりに近づいたころから、脇侍が作り始められた。東側の如意輪観音と、西側の虚空蔵菩薩である。これらは、銅製ではなく、塑像である。751年（天平勝宝3）9月には出来あがったので、開眼会に間に合った。ちょうどそのころから、盧舎那仏の台座の鑄造が始められた。しかし、こちらは開眼会には間に合わなかった。

仏身の鑄造が終わったころから、螺髪（わか）の鑄造が始められている。966個の螺髪は、751年（天平勝宝3）9月にはできあがった。これらは、仕上げ作業の終わった頭部に、はめ込まれていった。開眼会までには、その作業は終わっていたであろう。

仏身には、溶けた銅が回らなかった部分や、

うまく鑄造できなかった部分がある。これらを補鑄し、最後に表面を削り取りながら仕上げていく。この行程は、750年（天平勝宝2）1月から始められ、755年（天平勝宝7）1月まで続けられた。したがって、開眼会の時には、まだ仏身全体の仕上げ作業は終わっていなかった。

盧舎那仏は、全身に金メッキを施すことになってしたが、その作業が始められたのは、開眼会直前の752年（天平勝宝4）3月のことであった。したがって、開眼会の際には、せいぜい顔面の金メッキができた程度であったと推定される。

仕上げ作業と平行して、749年（天平勝宝元）12月から大仏殿の建築が始められた⁸⁾。その工事は急ピッチで進められ、開眼会の直前には、この巨大な建築物の本体部分は完成していたらしい。もちろん細部の作業は後まで続けられた。回廊部分は、開眼会の時にはまだできていなかった。西塔は、工事には取りかかっていたが、未完成であった。

以上、盧舎那仏の鑄造や大仏殿の建造の経過を見てきた。これによると、開眼会が行われた752年（天平勝宝4）4月9日の時点では、盧舎那仏は、顔面のみ金メッキされ、仕上げ作業の最中で、台座も鑄造途中であった。建築物では、大仏殿は細部以外はできていたが、西塔は建設中であった。講堂・東塔や光背などは、まだ着手すらされていなかった。

このように、開眼会は、盧舎那仏も東大寺も未完成の状態で行われたことがわかる。したがって、開眼会の開催は、かなりの無理をおして強行されたのである。そこまでして行われた理由は、一体何であろうか。それは、ちょうどそのころ、日本に仏教が公式に伝来してから200年目にあたる記念すべき年がめぐってくるからであった。こうして、仏教公伝200年目の釈尊の誕生日に、開眼会が予定されたのである⁹⁾。

しかし、開眼会の強行は、このためだけではなかった。つぎに述べるように、王族・貴族間の政治的対立が抜き差しならないところまで来ていたからであった。

3. 大仏開眼会の政治的背景

つぎに、なぜ東大寺が建てられ、盧舎那仏が鑄造され、その盧舎那仏の開眼会が行われたのであろうか。その政治的な背景について、説明しておく必要がある¹⁰⁾。

日本の8世紀は、仏教文化が花開いた時代であるとともに、その背後では都市貴族や王族間の熾烈な権力闘争が行われた時代でもあった。藤原氏が婚姻関係によって天皇と結びつき、それによって権力を握った。これに対して、その他の王族・貴族が大きく反発し、しだいに政治的な緊張が高まっていった。

聖武天皇の長男である某王¹¹⁾は、藤原氏の安宿媛が727年（神亀4）閏9月に生んだ。彼が次の天皇になることは、聖武天皇にとっても、藤原氏にとっても望ましいものであった。このため、彼は生後すぐに皇太子とされた。ところが、彼は728年（神亀5）9月に夭死してしまった。

ところがこれと入れ替わるように、別の夫人である県犬養広刀自が安積親王を出産した。安積親王は、聖武天皇の唯一の男子であるので、将来天皇位を継承する可能性が強い。藤原氏は、安積親王と血縁関係がないので、安積親王が即位した場合には、権力の中枢から排除されてしまうことになる。これは、藤原氏にとっては容認できないことであった。

当時の藤原氏は、不比等が720年（養老4）8月に死んだ後、その4人の息子たち（武智麻呂・房前・宇合・麻呂）によって代表されていた。4兄弟は、この時点では、聖武天皇と安宿媛との間には、当然つぎの皇子ができるものと考えていた。そこで藤原氏は、次に安宿媛が生むはずの皇子を確実に次の天皇にするために、安宿媛を皇后にしようと計画した。

しかし、日本古代では、皇后には皇女しかないという伝統が古くから強固に存在していた。安宿媛は、高級貴族の娘ではあるが皇女ではないので、この藤原氏の計画には、反対の声がかんがえられ、あがると予想された。有力な王族である長屋王が、この反対の中心になると考えられた。長屋王は、この当時、左大臣として政府のトップの地位にあったので、その反対は、か

なりの影響力を持つと考えられたのである。

そこで藤原氏は、長屋王に謀反の罪をかぶせて、729年（神亀6，改元して天平元）2月に自殺に追い込んだ。それと同時に、4兄弟が政治の実権を掌握し、安宿媛を皇后にした。これが光明皇后である。

藤原氏の4兄弟が実権を握る時代はしばらくつづいた。しかし、光明皇后（安宿媛）と聖武天皇の間には、ついに皇子はできなかった。これは、自分と血縁関係にある天皇の出現を目指す藤原氏にとって大誤算であった。それと同時に、聖武天皇にとっても、自分の後継者ができないことを意味した。このことによる聖武天皇の悩みは大きかった。

それに加えて、737年（天平9）に日本全国をおそった天然痘の大流行で、4兄弟をはじめ政府中枢が全滅してしまうという大事件がおこった。これによって、反藤原氏側の橘諸兄が政治の実権を掌握した。しかし、これに我慢できない藤原広嗣（宇合の長男）が、740年（天平12）に九州で大反乱を起こした。これをきっかけに、聖武天皇は、平城京を出て、以後5年間にわたって、新しく都を造ってはそこに移るということをくり返した¹²⁾。これによって、政治は大混乱に陥った。

聖武天皇と光明皇后は、王権を担う立場から、このような深刻な政治的分裂を前にして深く悩んだ。そして、分裂した貴族層を仏教によって統合し、国家を守ろうとした。

ここで、天皇と仏教の関係について、簡単に述べておく必要がある。日本古代の貴族たちは、高天原（天上界）に君臨していた天神の子が葦原中国（地上界、すなわち日本）にくんだり、日本を統治するようになったが、天皇はその子孫である、と考えていた。すなわち、天皇とは、日本古来の伝統的な宗教観にもとづく存在なのである。ところが、以上に述べたような貴族層の分裂、政治的な混乱によって、天皇の権威はいちじるしく動揺し、国家は分裂の危機に直面した。聖武天皇は、このため、仏教によって天皇の地位を基礎付け直すとともに、国家の統合を図ったのである。この場合、光明皇后の仏教信仰は深く、聖武天皇にも大きな影響を与えた。

まず、741年（天平13）2月に、聖武天皇は

国分寺建立の詔を出した。これは、国家の手ですべての国ごとに僧寺と尼寺の2つの寺院を建てよ、という命令である。国分寺は、7重の塔をもつ巨大寺院で、実際に各国で長い時間をかけて建造されていった。各国ごとに、国分寺と国分尼寺を中心に祈りを捧げ、仏教によって動揺する国家や王権を支えようとしたのである。

次に、聖武天皇は743年（天平15）10月に盧舎那仏造願の詔を出し、近江国の紫香楽で工事を開始させた。この詔で聖武天皇は、天下の富と権力を持つ自分が、国中の銅をそそぎつくして盧舎那仏を造るのだ、という強い決意を表明している。世界を庇護する盧舎那仏をつくり、仏法をこの世の隅々まで行きわたらせようとしたのである。これによって、盧舎那仏製作の基礎作業が進められた。聖武天皇は、盧舎那仏造立に没頭し、ついには紫香楽を日本の首都としたが、多くの反対にあい、これを断念した。

745年5月に、首都は5年ぶりに平城京にもどった。それとともに、盧舎那仏の造営地は奈良に移され、はじめからやり直されることになった。また、盧舎那仏を本尊とする東大寺を、平城京の東に隣接して建造することになった。その際、注意すべきは、東大寺が大和国の国分寺であったことである。

このことは、本来は別のものであった国分寺の造営事業と盧舎那仏の造願事業とが、東大寺という大寺院において融合したことを意味する¹³⁾。東大寺と盧舎那仏は、まさに、仏教によって国家や王権を救い、分裂した国内の政治状況を統一しようとしている聖武天皇の意思を体現するものであった。

749年（天平21，天平感宝元，天平勝宝元）正月に聖武天皇は出家し、仏にたいして臣従した。ついで、位を娘の阿倍皇太子にゆずり、孝謙天皇が誕生した。聖武天皇は太上天皇となって、盧舎那仏の造立と東大寺の建設にますます力を注いでいった。このような状況の下で、光明皇太后の政治的な発言権がつよくなっていった。藤原氏では、仲麻呂が光明皇太后と手を結んで、急速に台頭してきた。

このような仲麻呂の勢力拡大に対して、他の王族・貴族は反発を強め、貴族層の政治的分裂は、ますますはげしくなっていた。仏教によ

る統合は、ますます必要とされた。そのために、
盧舎那仏と東大寺の完成が急がれた。

以上のように見てくると、盧舎那仏の開眼会
そのものは、盧舎那仏に宗教的な生命を迎え入
れるための仏教的な儀式であるが、ただそれだ
けにとどまらない強い政治的メッセージが込め
られていたと考えなくてはならない。分裂し、
激しく対立しあう王族・貴族たちは、盧舎那仏
の前で融合しなければならないのである。

4. 大仏開眼会の構造

—『東大寺要録』の分析—

a. 醍醐寺本の検討

それでは、開眼会はどのような順序で進めら
れたのであろうか。この点をあきらかにするた
めには、『東大寺要録』の分析が必要である。こ
れは、開眼会に関する基本的な史料でありなが
ら、これまで十分に分析されることはなかった。

東大寺本の巻2

は、本来の要略では
なく、巻2は醍醐寺
本として残った¹⁴⁾。
醍醐寺本巻2は「縁
起章第二」と「供養
章第三」からなる。
開眼会に関する記載
は、このうち「供養
章第三」の部分に見
える。

これまで刊行さ
れた活字本では、字
配り等に対する配慮
が十分でない。そこ
で、醍醐寺本の写真
によって関係部分を
正確に示し（※は朱
点、◇は朱合点、各
行末の数字は行数）、
表1に整理する。

以下、『続日本紀』
の記載を参照しなが
ら、これらの記載を
検討したい。

(1)行目によると、
供養章第三は、大き
く「開眼供養会」と
「御頭供養会」から
なる。しかし、巻2
に「御頭供養会」に
関する記載はない。
そこで、東大寺本の
巻3の冒頭を見ると、最初に「供養章

※供養章第三	此有二 一開眼供養会 二御頭供養会	(1)
◇一 開眼供養会		(2)
皇帝敬請		(3)
※菩提僧正		(4)
◇以四月八日、設齋東大寺、供養盧舎那仏、敬欲開无边眼、朕		(5)
身疲弱、不便起居、其可代朕執筆、和上一人而已、仍請開		(6)
眼師、乞勿辭撰受、敬白、		(7)
皇帝敬請		(8)
※隆尊律師		(9)
◇以四月八日、設齋東大寺、欲講花嚴經、其理甚深、彼旨難		(10)
究、自非大德博聞多識、誰能開示方広妙門、乞勿辭撰受、		(11)
敬白、		(12)
※咒願 大安寺道瑯律師	請書如右	(13)
※都講 景静禪師	請書如右 使、各差五位	(14)
天平勝宝四年三月廿一日	勅書	(15)
◇以四月四日、太上天王、太皇太后、幸行東大寺、		(16)
◇六日、鎮裏京使	左從四位下百濟王孝忠 從五位上中臣朝臣清麿 右正五位下大伴宿禰公 從五位下建部君豐足	(17)
兵士四百人	各二百人	(18)
◇七日、諸家獻種々造花、		(19)
◇八日、留守官		(20)
◇九日、太上天皇、太后、天皇、座東大堂布板殿、以開眼、其儀式		(21)
並同元日、但無侍從、亦堂裏莊嚴種々造花、美妙繡幡、堂		(22)
上散種々花、東西懸繡灌頂八方懸五色灌頂、	西	(23)
其先請複位已上僧、自南門直參入、引道、		(24)
玄蕃頭外從五位下秦忌寸首麿		(25)
右中弁從位上景犬養宿禰古麿	五	(26)
◇次開眼師僧正菩提法師、乘輿捧白蓋自東入、迎、		(27)
正五位下賀茂朝臣角足		(28)
從五位上安倍朝臣嶋麿		(29)

◇次講師隆尊律師、乘差白蓋自西入、迎、	(30)	之余」とあり、つぎに
從四位上橘朝臣奈良麿	(31)	「御頭供養会」とある。
從四位上大伴宿祢古慈悲	(32)	そして、巻3の全体は、
◇次読師延福法師、乘輿差白蓋自東入、迎、	(33)	貞観3年（861）3月
從四位下藤原八束	(34)	14日に行われた大会
從四位下石川麿	(35)	に関連する記載でしめ
		られている ¹⁶⁾ 。
並着堂幄、即開眼師進仏前、取筆開眼、亦筆着繩、令集	(36)	そうすると、供養章
人等開眼了、即講読共登高座講説花嚴經、請衆僧沙弥	(37)	第三は巻2後半から巻
等、自南門左右頰以參入、引道	(38)	3にまたがっているこ
左、玄蕃助正六位上縣犬養宿祢吉男 右、允從六位上榎井朝臣馬養		とになる。巻3が「御
着東面北幄、即大安業師元興々福寺四寺、献種々奇異物、	(39)	頭供養会」の部分に相
繼自南門柱東、亦烈種々衆參入、	(40)	当するから、巻2後半
□		が「開眼供養会」に対
□ ¹⁵⁾	(41)	応することになる。(2)
〃		行目「一 開眼供養会」
◇大歌久米頭々舞	(42)	の「一」は、「二 御頭
從五位下大伴宿祢伯麿 從五位 佐伯宿祢全成		供養会」に対するもの
◇楯伏舞頭	(43)	なのである。筒井英俊
外從五位上文忌寸上麿 從五位下土師宿祢牛勝		校訂本の目次では、巻
◇左大臣已下擊鼓十六人	(44)	2後半の「供養章第三」
◇妓樂鼓擊六十人	(45)	は「開眼供養会」「供養
平群野中財人等也		舍那仏歌辞」「化人講師
◇頭	(46)	事」「開眼師伝来事」「東
治部卿從四位上船守 内匠頭從四位上太市王 雅樂助正六位上林連久万 少丞正位上安倍乙加志		大寺大会時元興寺献歌
◇唐散樂頭	(47)	三首并御製一首」にわ
近江少掾正六位上食朝臣息入 治部少丞從六位上高向家主		けられている。これら
◇唐中樂頭	(48)	全体が「開眼供養会」
治部少輔從五位下下毛野稻麿 雅樂大允正六位上津史真麿		の部分に相当するので
◇唐古樂	(49)	ある。左引用部分は、
治部少録正七位上土師宿祢虫麿 正七位下葛井連犬養		そのうちの、特に開眼
◇高麗樂頭	(50)	会に関係の深い部分に
治部少録正七位下船連虫麿 雅樂允正六位下橘戸広嶋		相当することになる。
◇度羅樂四寺行道二反廻畢、左右頰立於堂前、	(51)	つぎに、この部分の
左大臣以下 擊鼓着座		原史料について考えた
◇以次第奏	(52)	い。まず(3)～(15)の部
大歌女 大御舞卅人 久米舞		分は、皇帝が開眼師以
大伴升人 佐伯升人		下を招請する勅書を整
◇楯伏舞卅人	(53)	理して書かれたと見ら
檜前忌寸升人 土師宿祢升人		れる。これらの勅書は、
女漢羅歌百二十人		僧侶本人あてに発せら
立天平 大平		れたはずであるが、そ
◇跳子名百人	(54)	の写または副本が東大
唐古樂 一舞		寺に伝えられており、
唐散樂 一舞		
林邑樂 三舞		
◇高麗樂 一舞	(55)	
唐中樂 一舞		
唐女舞 施袴升人		
高麗樂 三舞		
◇高麗女樂	(56)	
◇同日夕入座東宮	(57)	

◇三宝施 一千疋	使大蔵省	(58)
◇講師施 三百疋、綿三百屯、布三百端	使、治部少輔從五位下下毛野朝臣稲麿	(59)
◇開眼師施 絶十疋、綿十屯、布十端	使、治部少丞正六位上高向朝臣家主	(60)
◇読師并咒願師 施物同開眼師	使、治部少丞正六位上安倍朝臣乙加志	(61)
◇法用 梵音二百人 維那一人	已上二百一人、各絶二疋、綿二也、布二反、	(62)
錫杖二百人	布施梵音同	(63)
唄十人 散花十人 定者二十人 納三百卅人 甲三百冊人		(64)
開眼師 供養師 読師 咒願師 都講師		(65)
維那師六人		(66)
◇一請僧千二十六口 各布施絶一疋	使大蔵省	(67)
◇一衆僧沙弥尼并九千七百九十九人	各施綿一屯、使大蔵省、	(68)
『或本』 ◇一衆僧沙弥九千人	已上都合一万二十六人、万僧供、	(69)
◇十日中宮行幸 東大寺奏種々楽		(70)

それを整理して書かれたと考えられる。

つぎに注意したいのが(42)～(50)である。この部分は、種々の楽舞の頭を列举した史料に由来する部分であり、(40)以前や(51)以後とはあきらかに異なっている。(40)で南門付近から種々の楽が列なって入場してくることを記し、(51)では、度羅楽や四寺の行道が2周めぐったのちに堂前に左右に分かれて立ったとしている。このつながりは、不自然ではない。むしろこの間に、(42)～(50)が入り込んでいると見

表1 開眼会の内容

記号	内 容	行数
(A)	聖武が開眼師以下を招請	3～15
(B)	4/4聖武と光明が東大寺に行幸	16
(C)	4/6鎮裏京使を任命	17～18
(D)	4/7諸家が造花を献上	19
(E)	4/8留守官を任命	20
(F)	4/9聖武・光明・孝謙が東大堂の布板殿に着座	21
(G)	開眼の儀式は元日と同じ、荘厳	21～23
(H)	複位以上の僧が入場	24～26
(I)	開眼師・講師・読師の入場	27～35
(J)	開眼の儀式	36～37
(K)	華嚴經の講説	37
(L)	衆僧・沙弥・沙弥尼の入場	37～39
(M)	4大寺から種々の奇異物を献上	39
(N)	種々の楽の入場	40
(O)	楽頭のリスト	42～50
(P)	度羅楽・行道、伎楽の上演、楽団・合唱団の整列	51
(Q)	種々の楽舞の上演 (a)大歌女、(b)大御舞、 (c)久米舞、(d)楯伏舞、 (e)女漢躍(踏)歌、(f)跳子名、 (g)唐古楽、(h)唐散楽、 (i)林邑楽、(j)高麗楽、 (k)唐中楽、(l)唐女舞、 (m)高麗楽、(n)高麗女楽	52～56
(R)	4/9東宮に入る	57
(S)	布施の支給	58～69
(T)	4/10中宮の東大寺行幸、種々楽	70

た方がよい。

そのことを前提にした上で、(42)～(50)を挿入と考えると、(44)(45)の記載が問題となる。この2行は、頭の人名とは関係がないからである。この点はどのように考えられるであろうか。そこで、それに続く(46)の記載の仕方に注目したい。(42)(43)(47)～(50)にも頭の名前が挙げられているが、それぞれどの楽舞の頭であるかが明記されているのに対して、(46)にはただ「頭」とあるだけで、どの頭であるかが示されていない。これがどの頭であるかは、(44)(45)によって判明する関係になっている。このことは、(46)が、(42)(43)(47)～(50)と同類ではなく、(44)(45)と一連の記載であることを示している¹⁷⁾。

そこで、(44)～(46)については、以下のように考えたい。これらは、もと(40)の次か、あるいは(51)の前にあったのではないか。(51)の細字双行部分に「左大臣以下撃鼓着座」とあることも、これを支持している。この左大臣以下の撃鼓とは、まさに(44)(45)を受けており、両者が一連の記載であることを示している。

以上から、もとは(40)以前、(44)～(46)、(51)以下の順に記載がならんでいたところに、(44)～(46)をのぞく(41)～(50)が挿入されたと考えられる¹⁸⁾。その際、(46)の「頭」が同類の記載として注意され、その頭の説明となる(44)(45)とともに現在の位置に移されたのであろう。

以上の勅書、種々の楽舞の頭を列挙した史料に由来する部分をのぞく残りの(16)～(40)、(44)～(46)、(51)～(70)の部分については、開眼会の様子を日付順にまとめた日記風の記録が存在し、嘉祥元年(1106)に『東大寺要録』が最初に編纂されたときに、これを用いて記述されたのであろう。

b. 大仏開眼会の進行過程

つぎに、開眼会の様子を具体的に検討したい。

(A) 752年(天平勝宝4)3月21日、聖武太上天皇が勅によって、高僧たちに対して開眼の儀式を行うように要請した。開眼師は菩提僊那¹⁹⁾、華嚴經の講師は隆尊²⁰⁾、呪願師は大安寺の道璿²¹⁾、都講師は景静²²⁾である。ただし、読師延福の招請のことは、ここには見えない。

(B) 4月4日に聖武太上天皇と光明皇太后²³⁾

が東大寺に行幸した。

(C) 鎮裏京使を任命し、兵士200名ずつで左右京を守った²⁴⁾。

(D) 諸家がさまざまな造花を献上した。

(E) 東宮と西宮に留守官を任命した²⁵⁾。

(F) 聖武太上天皇・光明皇太后・孝謙天皇は、東大寺に行幸し²⁶⁾、東大堂の布板殿に着座した²⁷⁾。この時、天皇が着ていた礼服²⁸⁾は、正倉院²⁹⁾に納められていたが、残念ながら今はない。しかし冠は、残欠になってしまったが、正倉院の中に現存している。

(G) 『東大寺要録』には「其儀式並同元日」とだけあるが、『続日本紀』には「天皇親率文武百官、設齋大会、其儀一同元日、五位已上者、着礼服、六位已下者当色」と詳しく記されている。これによると、東大寺の境内の会場には、すべての文官・武官が整列していた。彼らのうち、5位以上のものは礼服を着用し、6位以下のものは、朝服を着ていた。その有様は、元日朝賀の儀式と同じであったという。これは、天皇が元日に臣下から新年の挨拶を受ける儀式で、服属の確認の意味をもつ重要儀式であった。

(H) 複位³⁰⁾以上の僧1026人が南門から入場して来た。

(I) つぎに、開眼師の菩提僊那、講師の隆尊、読師の延福が、輿に乗り白い蓋をさしかけられながら入場してくる。菩提と延福は東から、隆尊は西から中央に進んだ。呪願師の道璿と都講の景静の入場の模様は、『続日本紀』『東大寺要録』ともに記されていない。

(J) 開眼師が仏前に進み、筆をとって開眼する。筆には綱がつけられ、それがつぎつぎと枝分かれしており、その先端を多くの人々が握っていた。これによって、参加者がみな開眼の行為を共有したことになる。この時使用された筆と綱は、開眼筆・開眼縷として正倉院に現存している。

(K) 読師が華嚴經を読み上げ、講師がそれを解説した。

(L) 約9000余の衆僧（一般の僧）、沙弥・沙弥尼（見習いの僧尼）が南門から入場ってきて、会場の西側の席に着いた。彼らと(H)の複位以上の僧1026人とを合わせると1万余人となる。これは、おそらく当時の日本にいた僧尼のかなり

の部分占めるであろう。最近これについて、正倉院に伝わる蠟燭文書、「僧交名」(塵芥29)その他が、実はこの時に開眼会に参列した僧尼の名簿であったことがあきらかにされた³¹⁾。

(M) 平城京の4大寺院(大安寺、薬師寺、元興寺、興福寺)から、さまざまな奇異物が盧舎那仏に献じられた。

(N)(O)(P) 種々の楽を演奏しながら、楽人たちが南門から入場してきた。度羅楽とともに、平城京の4大寺院による行道が会場を2廻りした。また、左大臣の橘諸兄が自ら先頭に立って伎楽の鼓を打った。これにつづいて、伎楽の演技が行われたであろう。以上の演者や、楽器の奏者と合唱団は、会場の東西に分かれて陣取った。

(Q) 種々の楽舞が、雅楽寮や臣下の家々によってつぎつぎと演じられた。(a)大歌女、(b)大御舞、(c)久米舞、(d)楯伏舞、(e)女漢羅(踏)歌、(f)跳子名、(g)唐古楽、(h)唐散楽、(i)林邑楽、(j)高麗楽、(k)唐中楽、(l)唐女舞(施袴)、(m)高麗楽、(n)高麗女楽、などである。

(R) 開眼会が終わり、その日の夕方に東宮に入ったとあるが、主語が省略されていて、誰のことか明らかでない。『続日本紀』によると、孝謙天皇はこの夕に藤原仲麻呂の田村第に「還御」したとある³²⁾。また、光明もこれに同行していたらしいことが指摘されている³³⁾。これによると、東宮に入ったのは聖武ということになる。

(S) それらが終わると、三宝以下、講師・開眼師・読師から衆僧・沙弥にいたるまで、仏教界の参加者全員に布施が与えられた。

(T) 中宮とは聖武の母である藤原宮子である。宮子は、開眼会の翌日、東大寺に來た。東大寺は、種々の楽を奏してこれを迎えた。

5. 大仏開眼会の構造と政治的意義

以上によると、開眼会は、5つの部分からなっていたと見ることができる。

(A)～(E)、(F)～(M)(T)、(N)～(Q)、(R)～(S)の4部分である。

第1の(A)～(E)の部分は、開眼会を挙げる

ための準備・配慮である。

第2の(F)～(M)の部分は、盧舎那仏開眼の儀式そのもので、仏教的な法会の中心部分である。ここでは、王族・貴族・官人によって代表されるすべての俗界の人々と、聖界のかなりの部分の僧尼とが参加していた。(T)は、おそらく藤原宮子の体調との関係で4月10日となっているが、本来は(F)～(M)と一体のものと理解される。

このうち、天皇と王族・貴族・官人に関する部分について、『続日本紀』と『東大寺要録』が、共にその有様は、元日朝賀の儀式と同じであったとしている点が重要である。この点については、すでに宮城洋一郎が注目し、律令国家が開眼会を最高の国家的仏教儀礼として把握していたことを指摘している³⁴⁾。筆者は、この指摘に賛成し、これを継承した上で、つぎのように理解する。すなわち、すべての王族・貴族・官人は、すべての人々を代表して、天皇に臣従し、さらに天皇を通して盧舎那仏に臣従したのである。

つぎに、僧尼のうち(A)の開眼師・講師・呪願師・都講という開眼の儀式をとりおこなった僧たちについても、宮城は重要な指摘をしている。すなわち、これらがインドからの渡来僧(菩提)、唐からの渡来僧(道璿)、学問僧(隆尊)、行基の弟子(景静)によって行われたということは、開眼会が、国際的な仏教界と国内の仏教界を含めて、仏教界全体を包括したことを意味している、という³⁵⁾。

この指摘にもとづいて、筆者はさらにつぎのように考える。すなわち、これらの僧たちは、その場に参列している僧尼を代表して盧舎那仏開眼の儀式を行なった。開眼会に参列している僧尼は、総数約1万で、前述のように、当時の日本にいた僧尼のかなりの部分をしめると見られる。その中には外国僧尼も含まれていたはずである。彼らは、日本のみならず、世界の僧尼を代表していたのである。盧舎那仏は、日本のみならず世界の仏教徒の願いを込めて開眼されたと考えられた。開眼された盧舎那仏の前に、すべての仏教徒はひれ伏すことになる。

以上によると、(F)～(M)の部分で、俗界のすべての人々は、天皇と盧舎那仏に臣従することを誓い、仏教界のすべての人々も盧舎那仏によ

る救済を願ったことになる。開眼の儀式で宗教的生命を得た盧舎那仏は、ただちにそこに参列している人々と、彼らを通じて、日本中のすべての人々を、調和の世界に導き入れたのである。それによって、人々の政治的対立は、仏の世界における調和へと昇華するはずである。

第3の(N)～(Q)は、諸芸能の上演部分である。ここで上演された芸能について、注目すべき指摘をしたのは、杉本一樹であった³⁶⁾。杉本は、これらの芸能は、(イ)大歌・大御舞などの宮廷に伝来した芸能、(ロ)久米舞・楯伏舞などの国内諸勢力の服属儀礼を象徴的に示す芸能、

(ハ)踏歌・唐楽・高麗楽・林邑楽など諸外国から伝わった芸能、の順序に整理できるという。そして、このうち日本古来の(イ)(ロ)は、王権の淵源とその伸張の過程を象徴しており、(イ)～(ハ)の全体は、宮廷伝来―国内の被服属者―外国という同心円の構造をしており、帝国の空間的な広がりを示している、という。また、開眼会において、四周の国々がこぞってわが王都に向かうという中華意識が高揚したことも指摘している。

杉本は、開眼会における芸能をこのように認識した上で、これらは、日本の天皇を中心として成立する古代帝国の支配構造を視覚的に表現したものである、と指摘した。この杉本の指摘は、開眼会における芸能の本質を鋭く洞察したものであるとして、賛成することができる。

その場合、次の点に注意しておく必要がある。それは、(ハ)の諸外国の芸能の中に百済楽と新羅楽が見えないことである。開眼会を、律令国家の中華意識の発揚の場として政治的にとらえるならば、高麗楽とならんで、この二つの楽が上演されることは望ましいことであったはずである。筆者は、この点について、かつて朝鮮半島にあった高句麗・百済・新羅の3国の楽を、高麗楽で代表して上演したと理解する³⁷⁾。この点をふまえた上で、筆者は、杉本の指摘をさらに展開したい。

筆者は、天皇が支配する帝国の姿を象徴的に示す芸能が、盧舎那仏の前で上演されたことを重視すべきであると考え。このことは、天皇の支配する帝国を、盧舎那仏の眼前に象徴的に再現して見せたことを意味する。盧舎那仏は、

天皇が支配する帝国を見たのである。これによって、天皇の支配する帝国は、盧舎那仏の庇護の対象となった。芸能は、その帝国を象徴的に表現していたのである。

開眼会の第4は(R)～(S)の部分である。天皇から、開眼会に参加したすべての仏教界の人々に布施が与えられた。それだけでなく、天皇は、盧舎那仏にも布施を捧げた。このことは、天皇こそが、人々の政治的対立を調和に導き、帝国の支配が確かなものであることを示した開眼会の主催者であることを再確認する意味があった。

以上、752年（天平勝宝4）4月9日に行われた開眼会の全体的な構造を解明し、それに込められた意味を理解することに努めてきた。それによると、開眼会は、芸能も含めて、全体として一つのメッセージを発していたといえる。そのメッセージとは、盧舎那仏が天皇の統治する帝国を庇護しており、天皇の統治とそれを背後から支える盧舎那仏の力によって、政治的な対立は解消する、というものであった。

6. むすび

先に述べた政治的背景からみて、盧舎那仏の造顕そのものは、宗教的な願いだけでなく、きわめて政治的な意図のもとに行われた事業であった。したがって、開眼会は、単なる仏への讃歌にとどまらず、分裂した都市貴族や王族、さらには日本の人々全体が、政治的に融和するという願いが込められていたのである。

天皇一家、すべての王族・貴族、すべての官人、すべての僧尼は、盧舎那仏の前の広場という同じ空間に一堂に会して、盧舎那仏への臣従を誓い、すべての芸能をともに鑑賞し、同じ体験を共有することを通じて、王権の権威を体感したのである。そして、開眼会に参列した人々は、自らも含めてすべての人々が盧舎那仏の庇護下にあることも認識したはずである。彼らは、今後は、盧舎那仏のもとに調和に満ちた世界がひろがることを信じたいと願ったはずである³⁸⁾。

注

1. 盧舎那仏は、毘盧舎那仏ともいう。華嚴経その他の經典における中心の仏で、輝く太陽に由来する仏である。毘盧舎那はサンスクリット語のVairocana（輝く太陽に由来するもの、という意味）の音写である。
2. 開眼会は、当初は4月8日の降誕会に行われる予定であったが、急遽、翌日に変更された。その理由を記している史料はない。しかし、野外で行われるものであったので、天候不順のために延期されたと推定されている。なお、降誕会とは、釈尊の誕生を祝う法会のこと、灌仏会、仏生会、花祭ともいう。日本では通例4月8日に行われた。
3. 『仏教語大辞典』（縮刷版、東京書籍、1981年5月）、『岩波仏教辞典』（岩波書店、1989年12月）。以下、繁をさけていちいち断らないが、適宜参照する。
4. 主要なもののみをあげるにとどめる。小野勝年「伎楽の源流に遡る」（『仏教芸術』39、1959年6月）、林屋辰三郎『中世芸能史の研究—古代からの継承と創造—』（岩波書店、1960年6月）、林鎌三『正倉院楽器の研究』（風間書房、1964年6月）、荻美都夫『日本古代音楽史論』（吉川弘文館、1977年9月）、蔵中進「大仏開眼会の漢詩」（『万葉』91、1976年3月）、同「大仏開眼会の短歌」（『神戸外大論叢』27-1.2.3、1976年6月）、藤原茂樹「天平の芸能—女舞と大仏開眼会と—」（梶川信行・東茂美編『天平万葉論』翰林書房、2003年4月）、同「渡来芸能の消長—伎楽・舞楽・散楽—」（『講座日本の伝承文学』6 芸能伝承の世界〔天野文雄・須田悦生・渡辺昭五編〕、三弥井書店、1999年3月）、野間清六『日本仮面史』（芸文書院、1943年9月、復刻版、東洋書院、1978年11月）、石田茂作『正倉院伎楽面の研究』（美術出版社、1955年11月）、正倉院事務所編『正倉院の伎楽面』（平凡社、1972年）、新川登亀男『日本古代の儀礼と表現—アジアの中の政治文化—』（吉川弘文館、1999年7月）その他。
5. 宮城洋一郎「東大寺大仏開眼供養会の一考察」（『木村武夫先生喜寿記念 日本仏教史の研究』永田文昌堂、1986年4月）。
6. 杉本一樹「正倉院宝物はなぜ国際色豊かなのか」（吉村武彦・吉岡眞之編『新視点日本の歴史』第3巻、古代編Ⅱ、新人物往来社、1993年5月）。
7. 盧舎那仏の鑄造経過については、前田泰次ほか「東大寺大仏の鑄造及び補修に関する技術的研究—その1〜8—」（『東京芸術大学美術学部紀要』4〜11、14、1968年3月〜76年3月、79年3月）、同『東大寺大仏の研究—歴史と鑄造技術—』（岩波書店、1997年2月）、川村知行『東大寺Ⅰ〔古代〕』（日本の古寺美術6、保育社、1986年6月）などを参照。
8. 東大寺伽藍の造営過程については、主に福山敏男『奈良朝の東大寺』（高桐書院、1947年4月）、同「東大寺伽藍の成立」「東大寺大仏殿の第一期形態」「東大寺大仏殿院」（いずれも『寺院建築の研究』中〔福山敏男著作集2〕中央公論美術出版、1982年10月、所収）、『奈良六大寺大観』9、10、11巻、東大寺一、二、三（岩波書店、1968〜72年）を参照した。
9. 『日本書紀』には、552年（欽明13）に、友好国の百済の聖明王から、金銅製の釈迦仏・経論その他が送られ、仏教が公式に日本に伝えられたことが記されている。開眼会が行われた752年（天平勝宝4）は、それからちょうど200年後にあたる。吉村怜「東大寺大仏開眼会と仏教伝来二百年」（『美術史研究』9、1972年3月）。
10. 開眼会にいたる奈良時代の政治過程については、以下の文献を主として参照した。繁をさけて、ここで一括して注記するにとどめる。岸俊男「元明天上天皇の崩御—八世紀における皇権の所在—」「光明立後の史的意義—古代における皇后の地位—」（ともに『日本古代政治史研究』塙書房、1966年5月）、笹山晴生「奈良朝政治の推移」（『奈良の都—その光と影』吉川弘文館、1992年7月、もと『岩波講座日本歴史』古代3、1962年8月）、野村忠夫「奈良時代の政治過程」（『律令政治と官人制』吉川弘文館、1993年12月、もと『岩波講座日本歴史』古代3、1976年3月）など。また、最近の奈良時代史の概説として、渡辺晃宏『平城京と木簡の世紀』（日本の歴史04、講談社、2001年2月）、佐藤信「律令国家と天平文化」（『律令国家と天平文化』〔日本の時代史4〕吉川弘文館、2002年9月）も参照した。

11. 名前不明。室町時代につくられた天皇家の系図である『本朝皇胤紹運録』にもとづいて基王とする説はとらない。
12. 榮原『今よみがえる紫香楽宮』（信楽町教育委員会，1994年10月，改訂版1998年3月），榮原『よみがえれ紫香楽宮』（信楽町教育委員会，2002年3月）にその状況を簡単に整理した。
13. 早川庄八『律令国家』（日本の歴史4，小学館，1974年2月）272～3ページ，瀧浪貞子『帝王聖武－天平の動き皇帝－』（講談社選書メチエ199，2000年12月）219ページ等に指摘がある。
14. 安藤更生「『東大寺要録』の醍醐寺本と，その筆者に就いて」（『仏教美術』12，1929年3月），同「東大寺要録撰述年代の研究」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』7，1961年12月）。
15. 続々群書類従11宗教部(一)所収本ならびに筒井英俊校訂『東大寺要録』（全国書房，1944年1月，国書刊行会復刻，1971年12月）では，ともに(41)を「勅」としている。この部分を写真によって検するに，最初に書かれた細身の文字の上に，太めの文字が重ね書きされているが，この両方とも読みとることができなかった。しかし，すくなくとも両方とも「勅」ではない。
16. 「供養章之余」の部分がのちの追加であることは，堀池春峰「東大寺要録撰纂について」（『南都仏教史の研究』上 東大寺篇，法蔵館，1980年9月）に指摘がある。
17. したがって(46)の「頭」は伎楽の頭と理解することができる。この考えは，注4小野論文に見える。しかし，小野は，何の説明もなく(45)(46)の2行を引用して(46)を伎楽の頭とするのみで，その根拠を示していない。これに対して，私見の根拠は，本文の通りである。
18. ただし，この挿入は，嘉承元年(1106)の『東大寺要録』の最初の編纂時になされたものであり，長承3年(1134)以後の追加とは考えていない。
19. 菩提僊那はインド僧で，704年（慶雲元）生まれ，760年（天平宝字4）没。バラモン出身であったので，婆羅門僧正とも呼ばれた。736年（天平8）に来日し，大安寺に住して常に華嚴經を誦していたという。
20. 元興寺の僧で，華嚴教学だけでなく，法相教学や戒律にも詳しくあったという。706年（慶雲3）生まれ，760年（天平宝字4）没。
21. 唐の僧。日本からの招きに応じて736年（天平8）に来日し，大安寺に住して戒律を伝えた。晩年には吉野の比蘇寺に移り，そこで没した。
22. 景静は行基の弟子で，行基の没後，大和国の生駒山で火葬してその骨を容器に納め，多宝塔を建ててその容器を収めたという。
23. この当時の「太皇太后」は藤原宮子である。そうであるとなると，宮子は4月4日と4月10日の2回東大寺にきたことになる。それはあり得ないことではないが，やや不自然である。宮子は(T)では「中宮」と称されている点を重視すると，この「太皇太后」は「皇太后」の誤りで，光明皇太后を指すと判断される。
24. 鎮裏京使については，岸俊男「長岡遷都と鎮京使－遷都における留守官の意義に及ぶ－」（『日本古代宮都の研究』岩波書店，1988年11月）参照。なお岸は，「鎮裏京使」の名称について，正しくは「鎮京裏使」ではないか，としている。
25. 平城宮の東宮・西宮については，前者を東院地区，後者を内裏地区に比定する考えと，前者を内裏地区，後者を第1次大極殿地区に比定する意見がある。仁藤敦史「平城宮の中宮・東宮・西宮－殿舎名称の変遷と権力構造の分析－」（『古代王権と都城』吉川弘文館，1998年2月）。
26. この「太后」は，注23と同じ理由から，光明皇太后のことと考えられる。(B)によると，聖武太上天皇と光明皇太后の2人は，4月4日に東大寺に行ったとある。これに対して『続日本紀』には4月9日に東大寺に行幸したとあって，東大寺行幸の時期が異なっている。この点は，後者の記事を孝謙天皇のことと理解することで解決される。先に聖武太上天皇と光明皇太后が東大寺に行き，当日に孝謙天皇が東大寺にきたのであろう。
27. 開眼会の参列者の位置関係は今ひとつわかりにくい。ここで聖武太上天皇以下が「東大堂布板殿」に着座したという点は注意される。これがどのような建物であるかは明かでないが，いづれにせよ大仏前の広場の東側に建てられた建物であろうから，聖武太上天皇以下は，この建物に入り，西を向いて着座したのであろう。そうすると，ここで問題になるのは，つぎの(G)

- で述べるすべての文官・武官たちがどのように整列していたのか、という点である。これについて、まず聖武太上天皇以下に対して東面していたという可能性を想定してみよう。しかし、これは、(N)(P)のように、芸能関係者が東西に別れて席を占めていたことからすると、可能性がまったくないとは言えないが、乏しいのではないか。そうすると、つぎの想定として、大仏の前に北面していたと考える方が、可能性が高い。もし、全官人が大仏に北面していたとすると、開眼会において、全官人が大仏に臣従し、それを東脇で聖武太上天皇らが確認したということになる。開眼会において、元日朝賀の儀式と同じ儀式がとりおこなわれたのは、全官人を大仏に臣従させるためであったのではないか。
28. 礼服は、朝賀の儀式・即位式などの大儀の時に着用する衣服。養老衣服令には、冠・衣・袴・帯・靴下・靴・持ち物などが、位ごとに区別して細かく規定されている。
29. 正倉院の北倉には、聖武太上天皇の遺品が納められ、中倉と南倉には、東大寺で行われた重要な法会で使用された道具類などが納められた。開眼会の使用品も後者に含まれる。ほとんどの宝物には、使用した法会とその年月日が詳しく記入して整理された。このため、開眼会の使用品を具体的に知ることができる。この場合を含めて、収納された宝物の使用目的がわかる点が、正倉院の宝物の価値をきわめて高めている。
30. 僧に与えられた位階の1つ。760年（天平宝字4）に整備される以前のもので、師位・半位・複位の別があった。一定の実績のある僧に与えられたものと考えられる。
31. 杉本一樹「蠟燭文書と塵芥雑張一東大寺盧舍那仏開眼供養供奉僧名帳の発見一」（『日本古代

文書の研究』吉川弘文館、2001年2月）。

32. 「還御」の語を重視すれば、孝謙はこれより以前に仲麻呂邸に入っており、そこから開眼会に出向き、また仲麻呂邸に帰ったことになる。
33. 岸俊男『藤原仲麻呂』（吉川弘文館、1969年3月）146ページ。
34. 注5宮城論文。
35. 注5と同じ。彼らの招請や教学については、井上薫『奈良朝仏教史の研究』（吉川弘文館、1966年7月）にも言及がある。
36. 注6杉本論文。
37. 開眼会全体のスケジュールから来る上演時間の制限の中で、演目の取捨選択が行われたであろう。その場合、政治的な判断に加えて、芸能それ自体としての優劣、プログラム全体としての演出など、さまざまな判断によって演目が決められたはずである。
38. このような場で上演される芸能に対して、王権側から、王権への服属をよく表現するようにという要請または圧力がかった可能性があり、または芸能の側から、王権への迎合が行われたという推定を取り払うことはむずかしい。われわれは、初期の形態から開眼会という政治的イベントにふさわしい形態へと芸能の変容が起きたかもしれないということを念頭に置いておく必要がある。

謝 辞

『東大寺要録』醍醐寺本の写真の閲覧については、東大寺図書館の横内裕人氏、奈良文化財研究所の渡辺晃宏氏にお世話になった。記して感謝する。

The Eye-Opening Ceremony of the Great Bronze Buddha at Todaiji Temple and Its Political Significance

Towao SAKAEHARA

In this article I examine the programme for the eye-opening ceremony of the Great Bronze Buddha at Todaiji temple and show its political significance.

The ceremony was held on 9 April 752, when there seemed few ways out of the fierce power struggles among the ruling classes, which included imperial families and civil aristocrats. That is the reason why the eye-opening ceremony was performed in spite of the incompleteness both of the bronze statue and of the temple buildings.

The political significance of the ceremony is, in my opinion, explained by its programme as a whole. The Daigoji manuscript of "Todaiji-yoroku", one of the most important sources of the ceremony, tells us that the ceremony consisted of four parts: preparations, a celebration of the Great Buddha, performing arts, and donations.

Examining each part, I came to the following conclusion: the ceremony demonstrated that the Great Buddha protected the Empire and that imperial sovereignty and the power of the Great Buddha would extinguish the political schisms in the ruling class.

Keywords : Todaiji Temple, Vairocana Buddha, Eye-opening Ceremony of the Great Bronze Buddha, Todaiji-yoroku, performing arts